vivo

水戸芸術館音楽紙［ヴィーヴォ］Vol.269

4-5

April & May 2025

特集 04

水戸室内管弦楽団
第115回・第116回定期演奏会

02 2025年度の水戸芸術館音楽部門の企画事業について
06 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

2025年度の水戸芸術館音楽部門の企画事業について

1990年に開館した水戸芸術館。初代館長に吉田秀和氏を迎え、新しい芸術文化を創造して発信すると共に、市民の皆さまの芸術文化活動の拠点となることなどを基本理念としてスタートしました。それ以来、音楽部門では、水戸室内管弦楽団（MCO）をはじめとする専属楽団の企画、ここでしか聴くことのできないオリジナル企画、国際的に活躍する演奏家を招聘する企画、そして地域の芸術文化の拠点としての企画を実施してきております。

開館から35年が経ち、この間に吉田秀和初代館長から小澤征爾第2代館長へとバトンが渡されましたが、小澤氏も昨年2月に逝去されました。音楽部門においても、開館以来、企画運営委員を務められた畑中良輔氏（声楽家・音楽評論家、元芸術総監督）、間宮芳生氏（作曲家）、若杉弘氏（指揮者）、小口達夫氏（専属楽団名誉顧問）が鬼籍に入られました。同委員の中では池辺晋一郎氏（作曲家）だけが現在も企画などに携わっていただいています。

こうした偉大な先人たちが遺してくれたものを受け継ぎ、昨年11月には片山杜秀氏が新館長に就任し、水戸芸術館は新しい一歩を踏み出そうとしております。その門出となる2025年度の音楽部門のラインナップを、ご紹介させていただきます。

「現代ピアノの巨匠たち」シリーズ

「水戸に世界の第一線で活躍する演奏家を招く、薫り立つような企画を実施したい」と、かつて吉田秀和初代館長は言っていました。その想いは現在も変わりません。2025年度は、現代を代表するピアノの大巨匠が出演する公演を集中的に取り上げます。それが「現代ピアノの巨匠たち」シリーズです。同シリーズはさらに「オーケストラ編」と「リサイタル編」に分けてお届けします。

「オーケストラ編」は、水戸室内管弦楽団の2つの定期演奏会が該当します。第115回定期演奏会（5月16日・17日）には、指揮者の広上淳一氏を迎えるとともに、もはやMCOの盟友とも言えるマルタ・アルゲリッチ氏が登場します。そして、第116回定期演奏会（11月1日・2日）には、ルドルフ・ブッフビンダー氏とMCOとの初共演が実現します。この2公演については、本誌で角増柊学芸員が詳しくご紹介しておりますので、そちらもどうぞお読みください。

そして、「リサイタル編」として、内田光子氏（10月25日）とクリスチャン・ツィメルマン氏（12月14日）によるピアノ・リサイタルをお届けします。内田光子氏はリサイタルを行う会場と回数を非常に限定しているために、ホール関係者たちの希望が叶えられることはあまりありません。そのような状況の中、吉田秀和初代館長の要望に応えて、また小澤征爾前館長との絆に想いを寄せて、内田氏は継続的に水戸芸術館でのリサイタルを行ってくれています。一方のクリスチャン・ツィメルマン氏も、小澤征爾前館長とは深い友情で結ばれており、水戸芸術館でのリサイタルは「セイジゆかりのホールでの特別なもの」として大切に想ってくれています。ピアノ演奏の理想に向かって一切の妥協を許さない求道者、ツィメルマン氏のステージにもご期待ください。

3つの専属楽団

2025年度の水戸室内管弦楽団の演奏会については、先程ご紹介した通りですが、小澤征爾館長が逝去されて1年が経ちました。たいへん有難いことに、楽団員のすべての方々が、小澤さんが水戸室内管弦楽団に遺してくれた音楽への情熱や魂をいかに未来へと繋いでいくかということを心に抱いてくれており、その想いを原動力に水戸室内管弦楽団は新しい一歩を踏み出そうとしています。

ヴァイオリンの庄司紗矢香氏、ヴィオラの磯村和英氏、ピアノの小菅優氏などによる新ダヴィッド同盟は、昨年12月に、これまで長い間待ち望まれていた初の東京公演を紀尾井ホールで開催しました。2025年度も水戸で

内田光子 © Decca Justin Pumfrey

クリスチャン・ツィメルマン ©Bartek Barczyk

の演奏会（9月18日）は勿論のこと、さらに活動範囲を広げるべく館外公演を計画しています。また、庄司紗矢香氏とイタリア人ピアニストのジャンルカ・カシオーリ氏とのデュオ公演（26年3月7日）と小菅優氏が独自の視点でピアノ・ソナタを俯瞰する「ソナタ・プロジェクト」のシリーズ最終回“晩年を迎えて”公演（26年3月22日）を開催します。

MCOばかりでなく近年はNHK交響楽団でもコンサートマスターを務めるヴァイオリンの川崎洋介氏、西野ゆか氏、ヴィオラの柳瀬省太氏、チェロの辻本玲氏によるカルテットAT水戸は、第3回演奏会（7月19日）を行います。今回はベートーヴェン作品や好評をいただいている同時代の作品などによるプログラムを予定しています。

水戸芸術館でしか聴けない
オリジナル企画

開館してからの10数年間は、先にご紹介した畑中良輔元総監督をはじめとする企画運営委員が企画を担っていましたが、吉田秀和初代館長の体制下で、その後は音楽部門の学芸員がその任に当たるようになりました。2025年度は、チェンバロ作品を中心にバッハの奥義に迫る「鈴木優人プロデュース J.S.バッハをとりまく音楽のシリーズ」の第2回公演（9月27日）を開催します。今回はバッハからモーツァルトへの系譜を追います。また、仏事を超えてわが国の伝統芸能の域へと昇華された声明の公演を行います。「聲明の会・千年の聲」の出演で、伝統的な〈四箇法要〉に加え、東日本大震災の津波で亡くなった親子の短歌をテクストにした宮内康乃氏作品を、震災15年目の節目に上演します。

ご好評をいただいているお昼のひとときにゆったりとお楽しみいただく「ちょっとお昼にクラシック」シリーズでは、カルテットAT水戸のメンバーで、MCOにも出演を重ねるチェロの辻本玲氏が登場します（26年2月6日）。さらに、水戸芸術館のオルガンを誰よりも深く知る室住素子氏の公演（11月）やMCO第2回ヨーロッパ公演にも参加した打楽器奏者の加藤訓子氏の公演を開催します。

地域の活性化と
音楽文化の発展を願って

一昨年7月に開館した水戸市民会館と国道50号線を挟んで隣接する水戸京成百貨店、そして水戸芸術館の3施設を合わせた地区として「MitoriO（ミトリオ）」という愛称が付けられ、中心市街地の活性化に期待が寄せられています。当館では、その期待に応えるべく、水戸市民会館と連携した事業を展開してきています。2025年度は、「天使の歌声」として世界中の人々から愛され続けているウィーン少年合唱団を招聘し、水戸市民会館で公演（6月11日）を開催します。

また、地域の音楽文化の一層の発展を目指して、茨城の演奏家の皆様の活動を支援する公演を、2025年度も継続して実施します。オーディションに合格した10組程度の演奏家の方々が出演するガラコンサートが「茨城の名手・名歌手たち」です。2025年度は、弦楽器、鍵盤楽器、邦楽器を対象とします。茨城ゆかりの演奏家の方々に、単独でリサイタルや演奏会を開催していただくのが「茨城の演奏家による演奏会企画」です。2025年度は次の7組にご出演いただきます。井上修氏（ピアノ）、冨永春菜氏（ソプラノ）、古橋明香里氏（ピアノ）、山田裕美氏（メゾ・ソプラノ）、アンサンブルくうま（女声合唱）、Coro La DIVA（女声合唱）、Nexus Brass Band（英国式金管バンド）

さらに、「水戸の街に響け！300人の《第九》」（12月7日）、「クリスマス・プレゼント・コンサート」（企画・おはなし：池辺晋一郎氏）（12月20日）、「0歳からのオルガン・コンサート」（出演：浅井美紀氏）（8月11日）、「合唱セミナー」、「プロムナード・コンサート」などの定例企画、小澤前館長が力を注いだMCO関連の教育普及企画の「水戸室内管弦楽団 子どものための音楽会」、MCOメンバーによるセミナー、さらにオルガンの教育プログラム「市民のためのオルガン講座」、「幼児のためのオルガン見学会」なども引き続き実施します。

片山杜秀新館長を迎えて、新時代に対応する唯一無二の文化施設を目指してまいります。皆様のご来場をお待ちしております。

水戸芸術館音楽部門
芸術監督　中村 晃

ピアノの巨匠たちと魅せる 革新と伝統のコントラスト

文：角増 柊

（※文中すべて敬称略）

広上淳一
©Greg Sailor

マルタ・アルゲリッチ
©Rikimaru Hotta

ルドルフ・ブッフビンダー
©Marco Borggreve

2025年度のコンサートホールATMでは、世界的に活躍するピアニストたちによる豪華公演を集中的にラインナップしたシリーズ「現代ピアノの巨匠たち」を展開します。そして、水戸室内管弦楽団（以下、MCO）の定期演奏会を本シリーズの「オーケストラ編」として位置づけ、5月にマルタ・アルゲリッチ、11月にルドルフ・ブッフビンダーと、クラシック音楽界を率いる熟達のピアニストお二方を招聘します。本稿では、お二方のご紹介とともに、結成35年目を迎えるMCOの2025年度プログラムについてご案内します。2025年度のMCOがお届けするのは、「革新と伝統のコントラスト」がまばゆいプログラムです。

革新的な面に出会える 第115回定期演奏会

MCOのもつ革新的な面を味わえるのが、第115回定期演奏会です。もはや円熟の域に達した指揮者の広上淳一、そして度重なるMCOとの共演で至芸を魅せ続けているアルゲリッチを迎えて、MCOにとって初めての演奏曲であるシューマンの〈交響曲第2番〉とバルトークの〈ピアノ協奏曲第3番〉に挑みます。

アルゲリッチは小澤征爾前館長とも親交が深く、MCOとは2017年5月開催の第99回定期演奏会から共演を重ねています。あまりに高名なピアニストであるがゆえ、当たり前のこととして見落としがちなのが、南米アルゼンチンの出身だということ。彼女の演奏はよく「ダイナミックで華麗」「情熱的で自由闊達」などと評され、人々の心を惹き込む躍動感やメリハリに満ちていますが、そのルーツには南米特有の“アツさ”が潜んでいるのかもしれません。クラシック音楽でアルゼンチンといえば、タンゴとクラシックやジャズの要素を融合させて数々の名作を生んだアストル・ピアソラ（1921～1991）や、その師匠でもあったアルベルト・ヒナステラ（1916～1983）の顔が浮かびます。いずれも、ラテン気質の熱気や情熱、キレ味のよいリズム感にあふれた作風が特徴的な作曲家で、アルゲリッチも彼らの作品の録音を残しています。日本人が自然と盆踊りのリズムに乗れるのと同じように、アルゲリッチの根底にはラテンの躍動感が脈々と流れているのでしょう。

ここからは、演奏曲のご紹介です。シューマンの〈交響曲第2番〉は1845～46年にかけて作曲されました。第2番と付されているもののこれは出版の都合によるもので、全4曲あるシューマンの交響曲のうち3番目に作曲された作品です。同じくドイツの作曲家メンデルスゾーンが指揮するライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団によって初演されました。45年9月にメンデルスゾーンへ宛てた手紙のなかで、自身が「トランペットとティンパニによる、ハ長調の嵐のようなファンファーレが頭のなかに鳴り続けています」と述べている風景がそのまま音に描かれたような冒頭部をもつ作品で、ほとばしる喜怒哀楽の表現にも革新性が宿っています。バルトークの〈ピアノ協奏曲第3番〉は、その100年後の1945年に作曲されました。白血病との闘病生活を送っていた作曲家が最後に仕上げた作品、つまり“白鳥の歌”です。最後の17小節をメモから書き起こす作業を残して、彼は亡くなってしまいましたが、その後に弟子のティボール・シェルリーが筆を引き継いで完成させました。従来のバルトークらしい野性味あふれる表現は影を潜め、生成りの生地のような素朴な響きがまるで土に還っていくかのように思えますが、その眼光は未だ鋭く光っています。アルゲリッチはその情熱的な演奏で、バルトークが最期まで持ち続けていた革新性を引き出してくれることでしょう。

「室内管弦楽」の枠組みを超えて、ロマン派・近代の名作にいどむMCOをぜひお楽しみください。

伝統的な面を堪能できる 第116回定期演奏会

MCOのもつ伝統的な面を味わうならば、第116回定期演奏会は外せません。クラシック音楽界における伝説的なピアニストの一人であるルドルフ・ブッフビンダーを迎えて、古典派によるピアノ協奏曲の名作――モーツァルトの〈ピアノ協奏曲第20番〉とベートーヴェンの〈ピアノ協奏曲第4番〉をお届けします。

ブッフビンダーはチェコ生まれで、1歳のときにウィーンに渡りました。その後わずか5歳でウィーン国立音楽大学に入学し、8歳でマスタークラスを履修、さらには9歳で最初のリサイタルを開くという神童ぶりで、その後の活躍には枚挙にいとまがありません。本稿の執筆時点で御年78歳ですから、まもなくピアニスト歴70年を迎える大巨匠です。ベートーヴェンが遺した32曲のピアノ・ソナタと5曲のピアノ協奏曲の全曲を幾度も発表するなど、とりわけベートーヴェンに造形が深いことで知られています。彼の音は、いわば恐ろしいほどに“解像度が高い”のが特徴に思えます。「この音がここに在る意味」を完全に解読・理解したうえで、1音たりともムダにせずフレーズの最後まで弾き切るような丁寧で緻密な表現が印象的です。さらに驚くべきことに、その1音ずつに身がギュッと詰まっており、音楽全体を眺めたときに表現の絶妙なグラデーションを描き出しているのです。この“解像度の高さ”を目の当たりにしたときの気持ちをたとえるならば、小さなレンガが寸分の狂いなく積み上げられたカテドラルから、崇高な精神や荘厳な魂を感じ取れる瞬間でしょうか。あるいは、澄んだ空気の山あいで満天の星空を仰いで、普段は見えない暗く小さな星までもがくっきりと輝く様子から、天体、ひいては宇宙全体との調和を読み取って畏敬の念を覚える瞬間でしょうか。彼の音とベートーヴェンの作品との親和性が高いのもうなずけます。

そんなブッフビンダーがMCOと演奏するのは、モーツァルトの〈ピアノ協奏曲第20番〉。短調の暗い響きのなかに激情がほとばしり駆け抜けていく至宝の傑作で、ベートーヴェンやブラームスなどが本作のためにカデンツァを残していることからも、ドイツ音楽の伝統の中心にある作品と捉えられます。余談ですが、図らずもアルゲリッチも9歳のとき、つまり、ブッフビンダーが最初のリサイタルを開いたのと同じ年齢のときに、この曲を演奏したそうです。ベートーヴェンの〈ピアノ協奏曲第4番〉は、ピアノとオーケストラとが対等な立場から手を取り合って穏やかに歩みを進めていく逸品です。一聴しただけでは気づきにくい、従来のピアノ協奏曲の慣習をやんわりと破るようなアイデアや工夫が随所に散りばめられています。たとえば、当時のピアノ協奏曲の冒頭といえば、まずオーケストラの華々しい伴奏から始まり、満を持してピアノが名人芸を披露する……というのが定石でした。しかし、この曲の冒頭はピアノ・ソロによる穏やかな弱奏です。けれども、「奇抜なことをしてやろう」と企んでいるというより、むしろ堅牢で伝統的な枠組みをじっくり味わうためのスパイスとして、こうした工夫を機能させているように聴こえます。

偉大な伝統の継承者であるブッフビンダーを迎え、古典派の名作とともに、豊かな経験に裏打ちされた綿密な音楽を語り継ぐMCOをぜひお楽しみください。

水戸芸術館で交差する ウィーンで学んだ日々

ところで、アルゲリッチとブッフビンダーは同じ先生に習ったことがあります。ブルーノ・ザイドルホーファーです。彼は1905年にウィーンで生まれ、1938年から1981年まで43年あまりにわたってウィーン国立音楽大学で教鞭を執り、アルゲリッチやブッフビンダーのほか、ブリギッテ・マイヤー（1944～）やフリードリヒ・グルダ（1930～2000）といった巨匠を次々と輩出しました。アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）やアルバン・ベルク（1885～1935）といった新ウィーン楽派の作曲家たちとも交流を持ちながら活躍し、1982年に亡くなったのもウィーンという、まさに生粋のウィーン人ピアニストです。

ブッフビンダーは彼とのレッスンを、次のように振り返っています。「彼は、言葉数の少ない人だったが、弟子にはいつも体で接した。彼が弟子の肩のどこかを押したとき、弟子はルバートのどこかが合っていないことに気づいた。それが彼の授業のやり方だった。（中略）私たちは皆、神様から、音楽を演奏するための、ピアノを弾くための何かをもらった」（ブッフビンダー公式HP内記事「回顧録」より）

巨匠たちの生演奏を臨場感いっぱいに体感できるのは、演奏者の息遣いまで感じられそうなくらいステージと客席との距離が近い、水戸芸術館コンサートホールATMだからこそです！シリーズ「現代ピアノの巨匠たち」にご期待ください。

■公演情報

水戸室内管弦楽団
第115回・第116回定期演奏会

【第115回定期演奏会】
2025.5.16（金）18:30開場 19:00開演
5.17（土）14:30開場 15:00開演
いずれも予定枚数終了
全席指定 S席¥19,000、A席¥16,000、B席¥13,000

●出演
広上淳一（指揮）、マルタ・アルゲリッチ（ピアノ）

●曲目
シューマン：交響曲 第2番 ハ長調 作品61
バルトーク：ピアノ協奏曲 第3番 Sz.119

【第116回定期演奏会】
2025.11.1（土）14:30開場 15:00開演
11.2（日）14:30開場 15:00開演
全席指定 S席¥11,000、A席¥8,500、B席¥6,500

●出演
ルドルフ・ブッフビンダー（ピアノ）

●曲目
モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番 ニ短調 K.466
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第4番 ト長調 作品58　ほか

【第115回と第116回のセット券】予定枚数終了
全席指定 S席セット券¥25,000
A席セット券¥20,000
※取り扱いは水戸芸術館のみ

INFORMATION

※以下は2月20日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《4.26(土)発売予定》

■カルテット AT 水戸 第3回演奏会
7.19(土)14:00

《5.31(土)発売予定》

■0歳からのわくわくオルガン・コンサート　にぎやか★オルガン
8.11(月・祝)11:00

好評放送中!

Lucky FM 茨城放送
「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」
毎週日曜 7:30〜8:00
パーソナリティ:石井哲也アナウンサー
出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおすすめの曲をご紹介して、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト
https://lucky-ibaraki.com/
▼radiko(ラジコ)でもお聴きいただけます
https://radiko.jp/

4・5月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆水戸室内管弦楽団 第115回定期演奏会
5.16(金)19:00、17(土)15:00 いずれも予定枚数終了
料金[全席指定]S席¥19,000/A席¥16,000/B席¥13,000
(第116回とのセット券:S席¥25,000/A席¥20,000) 予定枚数終了

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート
(入場無料/事前予約不要)
□4.12(土)11:00〜11:30/12:30〜13:00 内田莉子
□4.26(土)12:00〜12:30/13:30〜14:00 安達柚季
□5.4(日)12:00〜12:45 大木麻理★ゴールデンウィークスペシャル
□5.24(土)12:00〜12:30/13:30〜14:00 土生木理紗

市民のためのオルガン講座 2025年度受講生募集

◎一回体験:どなたでも気軽に、1時間オルガンを体験できるコース(定員12組)。
◎実技レッスン(初級):9月から半年間、12回のレッスンで基礎的奏法を学ぶコース(定員4人)。
◎実技レッスン(中級):初級を修了した方が、さらにオルガンを学ぶコース(定員:若干名)
◎実技レッスン(上級):原則、中級を3回修了した方が、さらに上を目指しより高度な曲に挑戦するコース(定員:若干名)
【申込期間】4.1(火)〜4.30(水)必着 ※レッスンの日程や応募方法は当館Webサイトをご確認ください。

茨城の名手・名歌手たち 第33回 出演者オーディション

11.9(日)に開催予定の演奏会に向けて出演者オーディションを行います。
【開催日】6.28(土) 鍵盤楽器・弦楽器・邦楽器部門(以上ソロ)、邦楽器アンサンブル部門
【申込期間】5.13(火)〜27(火)必着 ※受験資格や応募方法などは当館Webサイトをご確認ください。

茨城の演奏家による演奏会企画

2026年度に開催する演奏会企画を募集いたします。
【対象】茨城県にゆかりのある演奏家や県内を中心に活動している演奏団体
【申込期間】5.7(水)〜6.6(金)必着 ※受験資格や応募方法などは当館Webサイトをご確認ください。

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆ゆうくんとマットさんの
『おじいちゃんはロボットはかせ』
5.2(金)、5(月・祝)、6(火・振)各日10:00〜
5.3(土・祝)、4(日・祝)各日10:00〜/14:00〜
推奨年齢:3歳以上
原作:つちやゆみ『おじいちゃんはロボットはかせ』(文渓堂)
出演:ゆうくんとマットさん(小林祐介・大内真智)、堀口理恵、木村隆之、菊地侑紀、ほしら 他
料金:おとな¥2,800/こども(小学生以下)¥1,500
※お得な親子チケットもあります。詳しくは当館Webサイト(ACM劇場)をご確認ください。

現代美術ギャラリー

《ともだちになるためにぼくらはここにいるんだよ》2022年　森美術館蔵 ©The artist.

◆近藤亜樹:我が身をさいて、みた世界は
2.15(土)〜5.6(火・振休)
[休館日]月曜日(祝日の場合は翌火曜日)
[開場時間]10:00〜18:00(入場は17:30まで)
[入場料] 一般¥900/各種減免あり。コンサートホールチケット(有料のみ)のご提示で、本展に限り団体料金¥700でご鑑賞いただけます。

2025年3月11日発行(第269号)
編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村 晃、関根哲也、篠田大基、角増 柊、根本彩生、高木春佳、只木結乃
発行:(公財)水戸市芸術振興財団　〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8　Tel.029-227-8118(音楽部門)
Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30〜18:00・月曜休館)　https://www.arttowermito.or.jp/
デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE.　印刷製本:山三印刷株式会社

■編集後記

幼児のためのオルガン見学会、市民のためのオルガン講座、今年も実施します! 市内の幼児たちがオルガン演奏を真剣に聴いている姿は何年経っても感慨深いです。オルガン講座の1回体験は誰でも気軽に応募できます(定員12組)。この機会にぜひ! (春)

最近、再び頭を刈りたい欲に駆られている。昨年の今頃はいわゆる坊主頭だったのだが、あの爽快感が忘れられない。私の髪を慈しむ妻の言葉を押し切って坊主頭にした結果、ほかならぬ実両親が真っ先に私の悪事を疑ったのは、心外であった。私を育てたのはあなたたちだ。(角)

大学を卒業してから1年。あっという間に桜の季節になった。スイスにいる友人は私をいつでも遊びにおいでと誘ってくれている。多彩な特技をもつ友人たちとの話は世界の広さを教えてくれる。私も誰かにとってそんな人になれるよう励んでいきたい。(只)

現代美術ギャラリーで開催中の近藤亜樹展で新作絵画〈ザ・オーケストラ〉を観た。幅9メートルの大作。制作中の作家の年頭には小澤征爾さんの存在があったという。翼/手を広げてこちらを見つめる画中の赤い鳥。その目にマエストロの眼差しを感じた。(篠)

1年の月日が経つのは早く、瞬く間に新年度を迎えます。昨年初めて担当したパイプオルガン・プロムナード・コンサート、新年度もこのコンサートとともにスタートします。より多くの皆様に、さらに水戸芸術館を身近に感じていただけますように。(根)

本号がお手許に届く頃にはドジャースとカブスが日本にもう来ているでしょうか。私も抽選に申し込みましたが、自分の前に順番待ちをしている人数がPC画面に表示されるのです。水戸市の人口を軽く上回っていました。まあ、私はテレビ観戦します。(て)

20年以上も前の中学生のための音楽鑑賞会。ピアノの弦にボルトやゴムなどを挟んだプリペアド・ピアノを用意して、ケージの〈ソナタとインタリュード〉で幕開け。予期せぬ音への子どもたちの反応の瑞々しさが忘れられない。演奏をしてくださったのは藤井一興さん。ご冥福をお祈り申し上げます。(中)